

## 特集 「2017年度人工知能学会全国大会 (第31回)」

## 特集 「2017年度人工知能学会全国大会 (第31回)」にあたって

福島 俊一 (実行委員長, 科学技術振興機構)

## 1. 開催概要～過去最多の参加者数を記録～

2017年度の全国大会は、5月23日(火)～26日(金)の4日間、名古屋のウインクあいちにて開催した。発表件数は約750件、参加者数は2500名を超えた(図1)。ホテルメルパルク名古屋での交流会の参加者も1000名を超えた。また、55の企業・団体から協賛をいただいた。これらの実績値はいずれも、これまで31回の全国大会の歴史において最多となり、まさに第三次AIブームの最中、大盛況の全国大会となった。発表・聴講・展示それぞれの立場で大会に参加し、AI分野の発展に貢献いただいた皆様、ならびに、この大規模な大会運営を支えていただいた大会委員の皆様へ感謝を申し上げたい。

本特集にあたり、各大会委員・企画担当からの報告に先立ち、実行委員長の立場での振り返りを述べる。

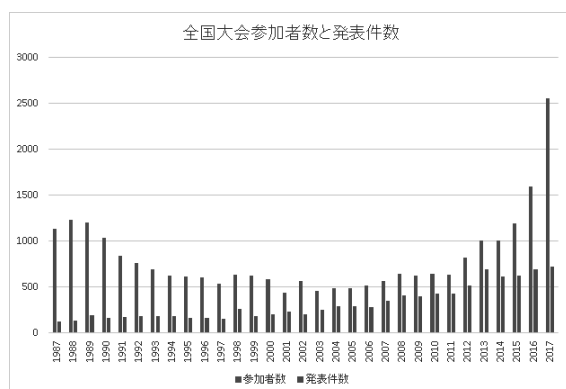


図1 全国大会の参加者数と発表件数の推移

## 2. 運営の工夫・課題

## ～産業界の関心、大規模大会運営～

今大会の参加者内訳は、企業からの参加者が多いのが特徴で約43%、大学からは約50% (その53%が学生)、国研他が約7%となった。企業は研究部門以外からの聴講者の比率が増えてきている。この傾向は前回大会でも顕著に見えてきていた。そこで、今大会では、このような参加者の傾向、産業界の関心にもミートするように新企画を立て、従来どおりの最新研究成果の発表・議論のためのセッションと分ける形で実施した。産業界の関心の高い技術を解説するチュートリアルセッション、産業界の事例やニーズを紹介するインダストリアルセッションなどである。これらはいずれも満席・立ち見となり、参加者の関心の度合いは予想を上回るものであった。

また、2000年頃と比べると、参加者数が4～5倍に

膨れ上がり、もはや大会委員のボランティアで運営できる規模ではないことから、運営業務の外部委託を本格的に実施した。今回が初めての試みで、まだ最適化はできていないが、2500名を超える規模に対応できたのは、外部委託の活用によるところが大きい。とはいえ、計画値の2000名(前回実績は約1600名)を大きく上回ったため、満席・立ち見の会場が多数発生、移動での混雑など、参加者に不便をかけてしまった。当日登録が約900名(参加者総数の1/3以上)という不確定性も、予算面で大きなリスクになった。大会運営にこそAIによる予測・最適化を活用するなど、改革が必要な時期かもしれない。

## 3. AIブームの先を見た研究開発のムーブメント

学会誌2016年11月号の巻頭言で、今大会への取り組み方針として、上述の産業界の関心と大規模大会運営への対応のほか、AIブームの先を見た研究開発のムーブメントが顕在化される場にしたいと述べた。大会ポスター(図2)のデザインにもこの思いを盛り込んだ。

何がそのムーブメントかは、大会運営側で定めるものではなく、多様な研究発表(多数提案されたオーガナイズドセッションなど)や参加者間の議論の中から各自が見いだすものだと思う。ただ、そのヒントや刺激になればと、招待講演枠で岡野原大輔氏と藤巻遼平氏の対談を企画し、司会を務めた。二人とも35歳で、世界最先端の技術開発とグローバルな事業開発の両方を牽引する業界のリーダーとして活躍されている。いまのブームの先を見据えた方向性を打ち出している。二人に存分に語っていただくのには時間が足りなかったが、AIは北米先行と言われることが多い中、参加者に日本の競争力・将来性を感じてもらえたものと思う。

最後に次回大会の日程だが、2018年6月5日(火)～8日(金)に鹿児島市の城山観光ホテルにて開催される。ぜひまた多数の参加をお願いしたい。



図2 今回の大会ポスター